

## \*もうすぐ春休み

28日に卒業式が終わり、3年生が巣立っていきました。14日には高校入試の合格発表が行われ、4月には新入生がやってきます。「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず（劉希夷）」春は別れと出会いの季節、寂しさを覚える一方で、心浮き立つものがあります。マスク生活にも終わりが見え始め、心機一転の春となる予感がします。在校生の皆さんも、進級に備え、充実した春休みを送って下さいね。

例年3年生になると専門分野に関する本の問い合わせが増えます。総合のレポートや大学入試で小論文や面接・総合問題が導入されることが増え、その対策として新書や学部に関連する本を手取る必要が発生するからかと思えます。でも実は3年生になってからは少し遅いのです。在校生、特に新3年生となる皆さんには、早めに進路希望先に関係した本を探して、読んでもらいたいと思います。県立図書館など、電子書籍が借りられる場所も増えてきています。大学入試だけではありません。読書は、皆さんの人生をより豊かに、色鮮やかにしてくれる知識や教養を身につける一助になるはずで、春休み少し時間の余裕がある時に、ぜひ本を手取ってみて下さい。




## \*春休みの開館予定

		備考			備考
3月20日(月)	○	修了式	29日(水)	○	
21日(火)	×	祝日	30日(木)	○	離任式
22日(水)	×		31日(金)	○	
23日(木)	○		4月3日(月)	×	
24日(金)	○		4日(火)	×	
27日(月)	×		5日(水)	×	
28日(火)	×		6日(木)	○	返却のみ

開館時間は8:30~16:30 4月は年度更新のため準備が整うまで返却のみ

## \*本屋大賞候補作そろっています!!

先日本屋さんでお話を伺ったところ今年の本屋大賞は混戦模様でどれが大賞になるかわからないということでした。好みは分かれるでしょうが力作揃い、ぜひ読んでみて下さい。(作品名50音順)

	『川のほとりに立つ者は』 寺地はるな(著) 双葉社	カフェの若き店長・原田清瀬は、ある日、恋人の松木が怪我をして意識が戻らないと病院から連絡を受ける。松木の部屋を訪れた清瀬は、彼が隠していたノートを見つけたことで、恋人が自分に隠していた秘密を少しずつ知ることになり、「当たり前」に埋もれた声を丁寧に紡ぎ、他者と交わる痛みとその先の希望を描いた物語。
	『君のクイズ』 小川哲(著) 朝日新聞出版	生放送のTV番組『Q-1グランプリ』決勝戦に出場したクイズプレイヤーの三島玲央は、対戦相手・本庄絆が、まだ一文字も問題が読まれぬうちに回答し正解し、優勝を果たすという不可解な事態をいぶかしむ。いったい彼はなぜ、正答できたのか？真相を解明しようと彼について調べ、決勝戦を1問ずつ振り返る三島はやがて、自らの記憶も掘り起こしていくことになり――。
	『宙ごはん』 町田そのこ(著) 小学館い、	宙には、育ててくれている『ママ』と産んでくれた『お母さん』がいる。宙が小学校に上がる時、ママのもとを離れ、お母さんと暮らし始める。待っていたのは、ごはんも作らず子どもの世話もしない、授業参観より恋人とデートに行く母親との生活だった。手を差し伸べてくれたのは、商店街のピストロで働く母の後輩佐伯だ。母への不満で、堪えられなくなって家を飛び出した宙に、佐伯はとっておきのパンケーキを作ってくれ、レシピまで教えてくれた。その日から、宙は教わったレシピをノートに書きとめ続けた。

	『月の立つ林で』 青山美智子(著) ポプラ社	永年勤めた病院を辞めた元看護師、売れないながらも夢を諦めきれない芸人、娘や妻との関係の変化に寂しさを抱える二輪自動車整備士、親から離れて早く自立したいと願う女子高生、仕事が順調になるにつれ家族とのバランスに悩むアクセサリ作家。つまりいてばかりの日常の中、それぞれが耳にしたのはタケトリ・オキナという男性のポッドキャスト『ツキない話』だった。月に関する語りを中心に寄せながら、彼ら自身も彼らの思いも満ち欠けを繰り返し、新しくてかけがえのない毎日を紡いでいく。最後に仕掛けられた驚きの事実と読後に気づく見えない繋がりが胸を打つ心震える傑作小説。
	『汝、星のごとく』 凧良ゆう(著) 講談社	風光明媚な瀬戸内の島に育った高校生の暁海と、自由奔放な母の恋愛に振り回され島に転校してきた權。ともに心に孤独と欠落を抱えた二人は、惹かれ合い、すれ違い、そして成長していく。生きることの自由さと不自由さを描き続けてきた著者が紡ぐ、ひとつではない愛の物語。
	『方舟』 夕木春央(著) 講談社	9人のうち、死んでもいいのは、――死ぬべきなのは誰か？大学時代の友達と従兄と一緒に山奥の地下建築を訪れた柀一は、偶然出会った三人家族とともに地下建築の中で夜を越すことになった。翌日の明け方、地震が発生し、扉が岩でふさがれた。さらに地盤に異変が起き、水が流入しはじめた。いずれ地下建築は水没する。そんな矢先に殺人が起こった。だれか一人を犠牲にすれば脱出できる。生贖には、その犯人がなるべきだ。――犯人以外の全員が、そう思った。タイムリミットまでおよそ1週間。それまでに、僕は殺人犯を見つけなければならない。
	『#真相をお話しします』 結城真一郎(著) 新潮社	ミステリ界の超新星が仕掛ける、五つの罠。日常に潜む小さな「歪み?」を、あなたは見抜くことができるか。子供が四人しかいない島で、僕らは「YouTuber」になることにした。でも、ある事件を境に島のひとたちがよそよそしくなっていく……(「#拡散希望」)。日本の「いま」とミステリが禁断の融合! 緻密で大胆な構成と容赦ない「どんでん返し」の波状攻撃に瞠目せよ。
	『爆弾』 呉勝浩(著) 講談社	無差別爆破テロ。動機も目的もわからない。爆弾の在り処の手がかりは、容疑者と思しき中年男が出す「クイズ」のみ。限られたヒントしかない状況で、警察は爆発を止めることができるのか。狭小な取調室の中で、最悪な男との戦いが始まる。
	『光のところにいてね』 一穂ミチ(著) 文藝春秋	たった1人の、運命に出会った古びた団地の片隅で、彼女と出会った。彼女と私は、なにもかもが違った。着るものも食べるものも住む世界も。でもなぜか、彼女が笑うと、私も笑顔になれた。彼女が泣くと、私も悲しくなった。彼女に惹かれたその日から、残酷な現実も平気だと思えた。ずっと一緒にはいられないと分かっているながら、一瞬の幸せが、永遠となることを祈った。どうして彼女しかダメなんだろう。どうして彼女とじゃないと、私は幸せじゃないんだろう……。運命に導かれ、運命に引き裂かれるひとつの愛に惑う二人の、四半世紀の物語
	『ラブカは静かに弓を持つ』 安壇美緒(著) 集英社	少年時代、チェロ教室の帰りにある事件に遭遇。以来、深海の悪夢に苦しみながら生きてきた橘樹は勤務先の全日本音楽著作権連盟の上司・塩坪から呼び出され、音楽教室への潜入調査を命じられる。目的は著作権法の演奏権を侵害している証拠を掴むこと。身分を偽り、チェロ講師・浅葉桜太郎のもとに通い始めるが…少年時代のトラウマを抱える潜入調査員の孤独な闘いが今、始まる。『金木犀とメテオラ』で注目の新鋭が想像を超えた感動へと読者を誘う、心震える“スパイ×音楽”小説!

今回本の内容説明は出版社によるものです。  
どれが大賞を取るか読み比べて予想してみるのも楽しいかもしれません。



良い春休みになりますように!! 元気に新学期を迎えて下さい。